

景観に現れる陰影の意匠性に関する研究

Design of Shadow and Shade

川崎 雅史*・荒川 英司・堀 秀行**・梶谷 拓生***

By M. KAWASAKI, E. ARAKAWA, H. Hori and T. KAJITANI

In this paper we tried to evaluate shadow spaces in traditional or historic districts and in contemporary urban districts to give new design vocabularies to urban design works. These subjects are studied by the psychological experiment using rating scales. For example, shadow spaces in the traditional spaces could be classified into four types, that is, mild, static, mild-static, and dynamic types. By comparing shadow spaces between Japan and Europe, we could appreciate differences of the climate and materials composing cityscape.

1. はじめに

(1) 陰影が生きる景観

景観に付随して存在している陰影は、時に景観の印象を大きく変化させることがある。例えば、小径のキャンパスに映る樹の影や紅葉や銀杏の葉を通して見る薄い木洩れ日は、自然の動きに優しさを感じさせる。また、都会の高層ビル群や港の倉庫群が夕暮れに創り出すシルエットは、都市風景の典型として映像メディアに多く表現されている。これらは都市に住む人々の新しい原風景の一つになっているかもしれない。

ここでは、陰影が景観対象として特化された景観を「陰影が生きる景観（シャドースケープ）」と呼ぶことにする。このような陰影が創り出す固有の景観は、人が陰影を景観対象として鑑賞し、その心象

風景を展開する中で形成される。本研究は、陰影が認識の支配的な要因となっている景観を研究対象として、陰影が景観の中にどのように生きているかを分析しようとするものである。現象面のみを見れば、陰影は景観の一要素であり単純に分離することは不可能である。しかし、景観の中で陰影が視対象として意識される固有な空間の存在も否めない事実である。そして、このような陰影の空間は、限られた場所や時間に存在する景観現象ではあるが、景観設計や修景におけるデザイン上の固有な特性の一つとして考えることができる。これまで、安定した実体がなく景観対象として扱いにくかった陰影であるが、陰影の図像是景観の純化された一つの表現モデルとも把握でき、これを評価することによって逆に風土や景観の理解を深めることもできると考えられる。

現代の都市開発では、都市景観の意義と扱い方が新たな変遷を迎えていると思われる。特に、建築ファサードやサインなどの街のメディアに対して、文化的な意味を多層的に仕組んだ意匠が展開され、街の動的な表情を生み出している。筆者らが記述した

*正会員 工修 京都大学大学院工学研究科助手
環境地球工学教室
**学生員 京都大学大学院工学研究科同上
(〒606 京都市左京区吉田本町)
***正会員 工修 株式会社淡青社

情報メディアと景観の関係性^{(1)・(2)}も、このような背景を前提にしている。これらは人の活動場所を演出するための街の図的な意匠である。

本研究はこのような考え方とは対称的な視点から、イメージや意味が積極的に顕在化しないが隠された意味をもつ静的な空間に着目したい。現代の情報や生活ノイズの多い都市には、文化的意味が積極的に問いかけてくる空間でさえも時には精神的負担になり、静寂感のある休息の空間を求める人も多いのではないだろうか。そのような静的な空間を一意的に定義することは困難であるが、例えば街路の緑陰や建物の影、また文学で表現される写実的な心象風景の中に、単に時間が流れて行くような休息の空間を見い出すこともできる。

本研究は、このような「陰影が生きる景観」、すなわち陰影が図像の意味をもち、人がその意匠を鑑賞しうだけのモノトーンな色合いをもつ空間のデザインに光をあてることを意図している。

(2) 研究の目的

景観現象としての陰影は、気候や街並みの素材および空間構成によって、その空間固有の図像を生ずることになる。これまで、筆者らは陰影の構成モデルや基本型を定義して⁽¹⁾、「陰翳礼讃」や現代詩に表現された日本の伝統的空間に現れる陰影の特徴を整理した⁽³⁾。その結果、柔らかい光と土壁や柱廊などの吸収性の高い素材から生まれる繊細な陰影にその特徴が特化していることがわかった。また、西欧の景観写真に現れる陰影の心理的評価を行い、視覚的な陰影のサンプルを類型化して整理した⁽⁴⁾。そこから、西欧の乾いた日照から生じる明瞭な光と影の対比などが意匠性として把握された。

本研究は、先の研究と同じ視点にたち、陰影の意匠性を把握するために、実際の景観に現れる視覚的な陰影のサンプルを意識分析の点から類型化して整理し、その景観的特性(空間構成や素材など)を明らかにすることを目的とする。具体的には、以下の諸点を考察する。

①京都の社寺建築を中心とした伝統的空間と、現代的都市の街並み景観を想定した2つの対象空間に現れた陰影のサンプルを抽出し、イメージ分析から類型化して、その意匠性を比較論的に整理する。

(3, 4, 5章)

②西欧の街並み景観に現れた陰影対象と、日本の伝統的空間および街並み景観に現れた陰影対象との比較考察を行い、その意匠性を明確にする。(5章)

なお、本研究を進めるに当たって、陰影の基本構成や基本型に関する用語は、注(1)にしたがう。

2. 陰影のイメージ類型を目的とした 心理評価実験の概要

(1) 調査対象となる陰影の選定

調査対象となる陰影は、社寺建築とそのアプローチ空間を対象とした日本の伝統的空間と、都市の外部空間を対象とした街並み景観の2つのグループに分けて抽出した。先の研究⁽³⁾では、日本固有の美意識が反映された陰影が、社寺や日本家屋を中心とした伝統的空間に現れることがわかった。また、新しい現代的な街並みは、鉄やコンクリートなどの新しい素材によって構成され、そこから生じる陰影は、伝統的空間とは別の図像を展開すると考えられる。

そこで、伝統的空間と新しい街並みを区別し、各々に現れる陰影の分析を比較論的に進める。具体的に評価対象とした陰影のサンプルは、次のように選定した。

①社寺を中心とした伝統的空間に現れる陰影の選択

初めに、京都の社寺を中心に、その参道、建築の内部空間に現れる陰影の写真撮影を網羅的行った結果、約300枚のサンプル写真が得られた。(対象空間は、大徳寺、祇王寺、桂離宮、上賀茂・下鴨神社、東山、嵐山、祇園石併小路、御所である。)この中から、陰影の図像ができるだけ違うもの、かつ陰影の構成要素(被写体・スクリーン)が違う組合せとなるものを、筆者を含む5名の判断によって分類整理した結果、30枚の写真が選択された。

②都市の街並み景観に現れる陰影の選択

伝統的空間と比較して、現代都市の風景に現れる陰影は、かなり広範囲にわたり数多くの量が存在するため、全てを網羅することは不可能である。そこで、対象地区を京都、大阪の都心部における商業街路、オフィス街に現れる陰影に限定し、網羅的に写真を約300枚収集し、先と同様に陰影の図像にできるだけ差異ができるように分類整理した結果、25枚の写真が選択された。

また、①、②とも、晴天の昼間12~14時に撮影し、

レンズは概ね人間の視野と一致する焦点距離28mmから35mmを用い、写真機の視線方向は陰影の構成要素が判別できる範囲で意識的視野に任せた。本研究では実際に近い刺激とするため、カラー写真を用いた。

(2) 心理評価項目

心理評価は、サンプル写真を刺激対象とした情緒的意味に対して、形容詞対の評価尺度を用いて行った。景観の中で陰影のみを分離して表現することは現実的には不可能であり、その心理的な意味は一定ではない。しかし、本研究では、評価の目的をできるだけ陰影の図像的な意匠性の類型に限定するため、調査では被験者に写真の中の陰影に注視させ評価の中心刺激となるよう促し、評価項目に回答させた。すなわち、8つの5段階形容詞対尺度を用いた。これらは、刺激となる対象景観の写真を用いた自由連想による予備実験を行い、頻度の高いものを基準に、陰影を独立に評価するのに適すると考えられる8つの尺度(1.動的な-静的な, 2.陽気な-陰気な, 3.軽やかな-重々しい, 4.美しい-醜い, 5.有機的な-無機的な, 6.女性的な-男性的な, 7.はっきりとした-ぼんやりとした, 8.暖かい-冷たい)を選定した。

(3) 被験者と実施手順

被験者は、京都の大学生を対象とし、24名である。調査は、刺激景観写真と調査票を与え、特に提示時間の制約や説明は与えず、評価項目に回答させた。

(4) 陰影のイメージ類型の分析方法

陰影のイメージ類型化の手順を以下に整理する。

- STEP1 各対象景観の各評価尺度における評価スコアの平均値を算定する。8つの評価言語は独立であることを仮定して、8次元の評価スコアによるクラスター分析を実施する。
- STEP2 対象の階層全体を記述し、比較的マクロな階層概念から対象景観の特性を記述するためのミクロな階層を設定する非類似度を定める。
- STEP3 抽出したクラスターの各プロフィール曲線をもとに高い平均値スコア(0.7以上)を示した評価言語を抽出し、類型評価を特定する。
- STEP4 クラスター階層図をもとに先の評価言語を用

いて記述し、得られた類型に属する対象の特徴を記述する。

3. 伝統的空間に現れる陰影

(1) 情緒的イメージ評価による階層と類型

クラスター分析の結果得られた日本の伝統的空間に現れた陰影対象の類型階層図を図1に示した。この階層を概観すると、主として静的、美的の評価の組合せで得られる陰影の型が対象のほとんどを占めていることがわかる。そこで、非類似度10.00における4類型を抽出し、美的・女性的と評価される『柔らかな影』(mild type)、静的・重厚と評価される『静かな陰影』(static type)、両者の評価を併せもつ『柔らかく静かな陰影』(mild and static type)、また、サンプル数は1つであったが、男性的、有機的と評価される『力強い陰影』のように分類定義した。さらに、各対象景観の特徴を具体的に記述するために、より細分化されたタイプ名を非類似度8.40で定義した。

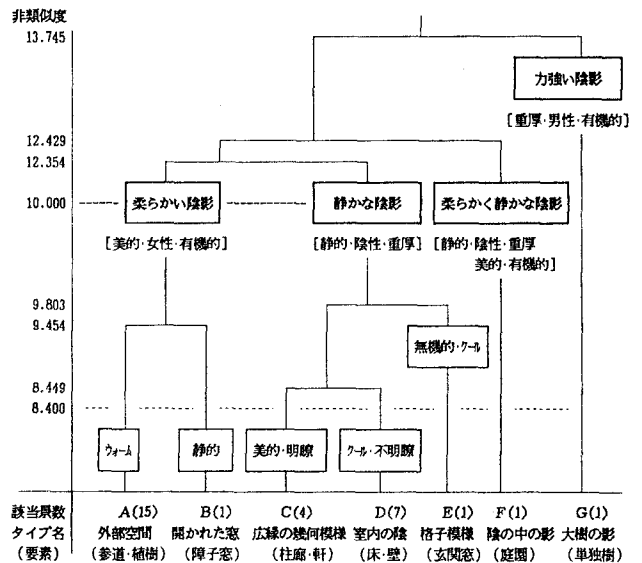


図1 日本の伝統的空間に現れる陰影の類型（対象30景）

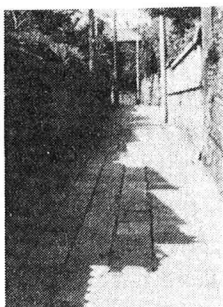
(2) 陰影類型の景観の特徴

得られた陰影類型の景観的特徴を以下に記述した。ただし、『』（）には型名と評価言語を示し、各タイプ記号の次の（）には、命名したタイプ名を記した。

①『柔らかな陰影』（美的・女性的・有機的）

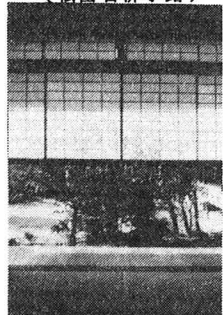
この型は、多くが参道や川面などの社寺建築への外部のアプローチ空間（タイプA）と、建築における外部空間との境界における特殊な障子窓（タイプB）に現れる美的・有機的な影である。

タイプA（「外部空間の柔らかな影」）は、調査対象全体の半数が該当し、日本の伝統的空間の典型的な特徴を示す影である。明るい陽光の中で、植樹や家並の有機的な形の被写体⁽¹⁾が、石畳などの吸収性の高いスクリーン⁽¹⁾の上に、柔らかく美しい影を形成するタイプである。



写1 柔らかな影(A)
(祇園石併小路)

タイプB（「開かれた障子窓」）は、大徳寺孤篷庵の影が該当した。外と内の境界に位置する障子窓の下半分は開放され、庭園が切り取られて見える光どり⁽¹⁾である。上半分には障子の棧がつくる幾何学的で静的な影をつくり、上下別の陰影の融合から柔らかなさが表現される稀少な対象である。

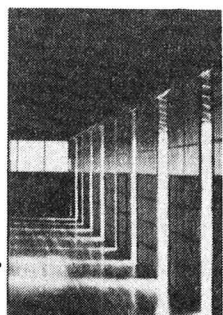


写2 開かれた障子(B)
(大徳寺孤篷庵)

②『静かな陰影』（静的・重厚・陰的）

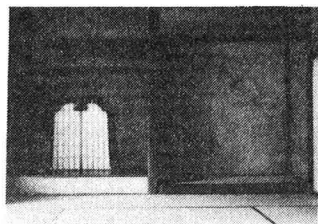
この型は、外部空間と建築の境界における柱廊や障子窓などの被写体がつくる直線的な幾何模様の影や、建築室内にできる薄暗い陰である。これらは伝統的な建築工法の中で生まれた柱や梁の均整ある配置や形がつくる静的な図像を明瞭に表現していると考えられる。

タイプC（「広縁の部材がつくる幾何模様」）は、縁先の軒や広縁に存在する柱や障子の棧などの連続的な幾何模様が明瞭な影に呈している。光と影の対比が明瞭であるため、象徴的な冴え⁵⁾が感じられ、美しい印象を与える。



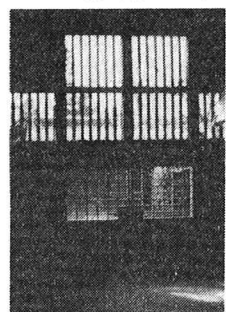
写3 縁の幾何模様(C)
(南禅寺天殊庵)

タイプD（「薄明りと室内の陰」）に該当した日本の室内空間は、床の間、土壁、次の間、広縁、出窓などの部分的な空間要素によって構成され、いくつもの空間の窪みや隅が重複する。障子窓を通じて入る薄明りの光が、襖や土壁の吸収性の高いスクリーン⁽¹⁾を伝わり、奥まった隅や窪みに誘い込まれ、連続的な階調の陰が視覚的な奥まりとともに深く静かに表現される。



写4 室内の陰(D)
(大徳寺孤篷庵)

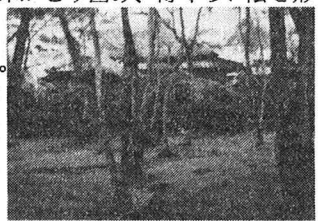
タイプE（「格子模様の光どり⁽¹⁾」）は、寺院室内（大徳寺方丈）から障子紙のはっていない裏玄関の窓口のスリットを通じて、外部景観が切り取られて見える光どりである。棧と窓格子の幾何学的模様が無機的でクールな印象を与えている。



写5 格子模様の光(E)
(大徳寺方丈庫裏)

③『柔らかく静かな陰影』（静的・美的・有機的・陰的）

タイプF（「陰の中の影」）に該当した祇王寺の庭は、庵の周囲を樹木がとり囲み、薄ぐらい陰を形成してスタティックな空間を作っている。樹木から洩れた光が地面に履った苔を照らし柔らかな影をつくり、有機的な美しさを表現している。静かな陰と柔らかな影の両方が重なっている型である。



写6 陰の中の影(F)
(嵯峨野祇王寺)

④『力強い陰影』（重厚・男性的・有機的）

タイプG（「大樹の影」）は、楠（青蓮院）の輪郭線による影であり、



写7 大樹の影(G)
(東山青蓮院の楠)

太い幹から細い幹への生命の流れや力強さが感じられるダイナミックな陰影である。単独樹はその下に休息空間があることの予感性や周囲を見張らす意志性があること⁶⁾、また参道における常緑の植樹は永遠の象徴を表現する⁷⁾と言われ、変化に動じない男性的な印象を与える。

(3) 伝統的空間と陰影のシーケンス

日本の伝統的空間に現れた陰影対象は、表1に示されるように、参道・庭園などの外部空間では「柔らかな影」が、縁や軒先などの外部と建築のインターフェイス(境界)部分では「静かな影」が、また室内空間では「静かな陰」がその典型として現れることが調査結果よりわかった。外部空間から伝統建築へアプローチするにしたがって、外部空間の植樹でできる質感や量感のある柔らかな影を体験し、建築の玄関や広縁において、柱や障子窓の直線で構成される幾何模様の静的な陰影で冴えを感じさせる。そして、建築内部へ進むにしたがって連続的な階調の変化に応じた陰が深く進むという一連の陰影のシーケンスを体験することが指摘できる。

表1 社寺空間の構成と陰影類型の関係

内 内 内 内 内				
内 内		内 内		内
空間構成		空間構成		空間構成
陰影		陰影		陰影
内部空間(内陣)		インターフェイス空間(庇・縁)		外部空間(庭園)(参道)
柔らかな影				B(1)A(2) A(13)
静かな陰影		D(7)	C(4)E(1)	
力強い影				G(1)
柔・静かな影				F(1)

()内は該当数を示す

4. 都市の街並み景観に現れる陰影

(1) 情緒的イメージ評価による階層と類型

クラスター分析の結果得られた日本の街並みに現れる陰影対象の類型階層図を図2に示した。

この非類似度の高い階層から概観すると、大きく2つの階層に分かれ、さらに非類似度9.63にて4つの類型が抽出される。すなわち、美的・女性的と評価される『柔らかな影』(mild type)、動的・有機的

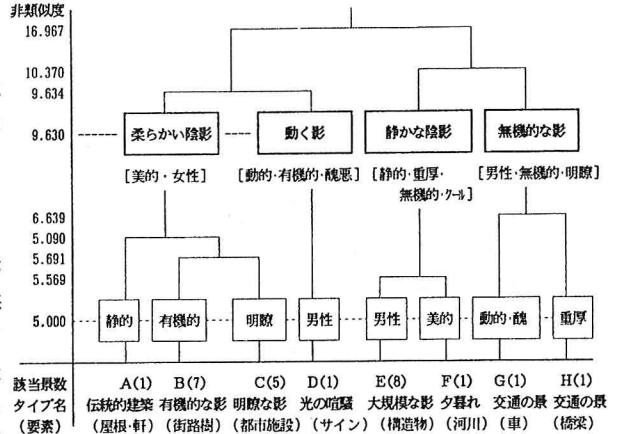


図2 日本の街並みに現れる陰影の類型(対象25景)

的と評価される『動く影』(active type)、および静的・重厚である『静かな影』(static type)、男性的・無機的である『無機的な影』(clear type)の4つの型に整理される。また、各対象景観の特徴を具体的に記述するために、より細分化されたタイプ名を非類似度5.00で定義した。

(2) 陰影類型の景観の特徴

得られた陰影類型に関する対象の景観の特徴を以下に記述した。

①『柔らかな陰影』(美的・女性的)

この型は、主として街路樹が道や水辺のスクリーンの上に女性的で有機的な影をつくる場合と、人や車の活動場所の都市施設や建築およびサインにおけるコンクリートやプラスチック、ガラス、鉄などの多様な素材と色彩が複雑な重ね合わせで女性的で柔らかな陰影を生む場合を含んでいる。いずれも影どりのある鏡映りの陰影⁽¹⁾であり、都市の緑と多様な素材がうむ美的な陰影である。

タイプA(「伝統的商業建築がつくる静的な影」)の伝統的な商業建築が並ぶ先斗町通りには、屋根や軒が凹凸の変化のある女性的な影を作る。白と黒を基調とした建築やサインの色彩やテクスチャと呼応し、有機的で女性的な印象を与えている。



写8 商業建築の影(A)(先斗町)

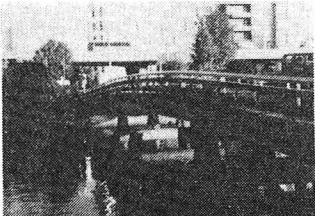
タイプB（「街路樹の有機的な影」）

該当する陰影はすべて樹木を被写体とし、水面に鏡映りしている場合と土の路面に影どりになっている場合の2通りである。柔らかいスクリーンの上に、細やかに動く光と影の輪郭線は、有機的で女性的な印象を与えている。



写9 有機的な影(B)
(東山疎水)

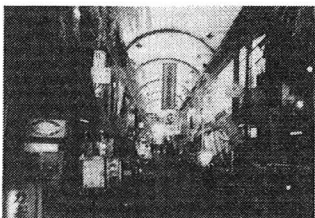
タイプC（「現代都市の素材がつくる明瞭な影」）は、都市内街路に現れる日常的な都会の風景に現れる陰影である。土木構造物や人・車などを被写体として、夕暮時の陽光やアーケードの天窗を通る人工光など柔弱な光が、河川の水面や黒光りするアスファルト、タイルなどの反射性の高いスクリーンに跳ね返り、多様な黒の階調が明瞭に表現される影ができる。また、スクリーンが間接照明的に働いて被写体を照り返し、構造物の輪郭を浮かび上がらせ、被写体とスクリーンの転換を生み出している。原色のサイン色彩の重ね合わせの作る景も都市の明瞭な2次的な輪郭を作っている。このような陰影は、都市の素材から生まれる柔らかさを表現する意匠である。



写10 明瞭な影(C)
(大阪)

②『動く陰影』（動的・有機的）

タイプD（「サインと光の喧騒」）は、商店街のアーケードから光が差し込み、広告主張の強いネオンサインや看板装飾が競争的に乱立する光どりである。このような大衆の目にふれる無秩序で直接的な商業サインの交錯は、都市固有の有機的な情緒を与えるが、寺院や教会の光どりがもつ神聖さのシンボリズムは感じられない。交錯した街のメディアの輪郭線、ネオンの光と流動する人の陰影が、景のアクティブな



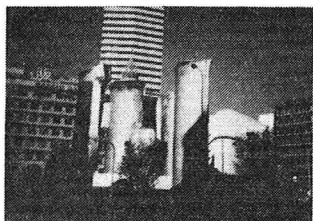
写11 サインの喧騒(D)
(天神橋商店街)

動きを表現する型である。

③『静かな陰影』（静的・重厚・無機的）

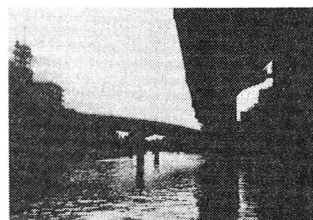
この型は、ビルの谷間や高架橋の下に生じる大規模な構造物の陰影であり、街を静かに包む印象がある。構造物の被写体はシンプルな線で構成され、スクリーンの素材も無機的であるため、堅固に固定された像を生じ、重厚でスタティックな印象を与えている。

タイプE（「都市構造物がつくる大規模な陰影」）は、光と影の対比が明瞭で都市の輪郭線を描く大規模な影、またはビルの谷間にできる薄ぐらい陰である。このような都市空間を覆う深い陰影は、幹線街路や高架下の飲食店、都市内広場などを隠すように暗所を作る。現代的なビルディングや高架道路などの人工構造物のもつ幾何学的な輪郭線は、クールで男性的な図像をつくる。



写12 大規模な陰影(E)
(大阪梅田)

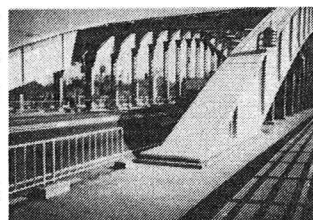
タイプF（「夕暮れの鏡映り」）は、夕暮れの柔弱な光を受けて、河川水面に浮かぶ高架道路の陰影が微かに鏡映りしている風景であり、静かな印象を与える。有暮れ時には、風景から色彩が消えてモノトーンになるにしたがつて、これまで見えなかった街のシンプルな構成が浮かび上がり、陰影が静寂の図像の美しさ伝える主景となる。



写13 夕暮の鏡映り(F)
(中之島;堂島川)

④『無機的な影』（男性的・無機的・明瞭）

この型は、昼間の一般道路において見られる日常的な要素である車(タイプG)や橋(タイプH)を被写体とする交通の景を表現する陰影であり、その機能的な



写14 無機的な影(H)
(桜宮橋)

形から無機的で男性的な印象を与える。

(3) 陰影が生きる都市の景

ここで整理された陰影類型の中で、意匠性として特に着目したいと思われるのはタイプC、E、Fである。これらのタイプは、現代の都市施設の素材や構成がなんら必然的な意図をせずにつくりあげた景観であるが、陰影が美的な評価を受け、主景になっている。現代の都市が一般的に無機的で混頓とした風景として論じられる中で、忘れがちな都市の固有な景であると思われる。混頓とした色彩や雑多な意味が消失する夕暮れ時のモノトーンの景には、都市の骨格の図像だけが浮かび、その静寂さは都市に生きる人々に一時の休息の場所を与えられると思われる。それを生かすためにも適度な暗さを確保することが必要であり、安易な都市照明にも反省を促すと考えられる。

5. さいごに

本研究は、日本の伝統的空間と現代的な街並み景観に現れた陰影対象の類型と景観の特徴を整理し、意匠性の評価とした。この章では、さらに次の2つの考察を通じて、意匠性の評価を整理したい。

(1) 日本の伝統的空間と街並みに景観

に現れる陰影対象の比較考察

3章と4章の類型結果のマクロな差異比較を以下に整理した。

①伝統的空間、街並み景観の両方のサンプルとも、「柔らかな陰影」と「静かな陰影」が大きな割合を占める。

「柔らかな陰影」は植樹による陰影であり形態も共通している。「静かな陰影」は両者の構成内容が違い、伝統的空間では伝統的な建築工法が生み出す幾何模様が冴えを感じさせるのに比べて、都市風景では構造物の大規模なスケールと反射性の強い素材が無機感や冷たさを生み出す場合と、美的なモノトーンの景をつくる場合がある(4章3項参照)。

②伝統的空間では得られなかった街並み固有の陰影対象として、「動的な陰影」と「無機的な陰影」が得られた。これらは、都市の消費文化を示す商業サインと都市機能の象徴である交通施設の陰影であった。

(2) 日本と西欧の景観に現れた陰影の比較考察

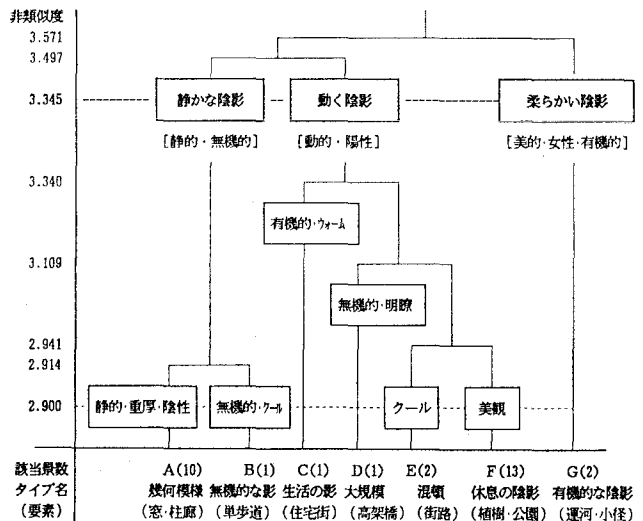
最後に、本研究で得られた日本の伝統的空間および都市風景に現れた陰影対象の意匠性をより明確にするために、既に整理された西欧の風景に現れる陰影⁴⁾(図3)との比較考察を記述し、研究の整理としたい。ただし、比較対象とする西欧の陰影は、文献4)の調査結果であり、夏期における南欧(イタリア)と北欧(フランス・オーストリア)の伝統建築を含む一般的な都市風景30景を調査対象としている。

①日本と西欧の調査対象に現れた陰影の典型

日本の伝統的空間と街並み景観の対象空間とも、植樹を被写体とする『柔らかな陰影』(該当景割合52%)と、建築、都市構造物による『静かな陰影』(53%)が中心であるのに対して、西欧の風景では、陽気で律動感を感じさせる『動く陰影』(57%)と『静かな陰影』(37%)が特徴的である。

②日本の対象空間に現れた『柔らかな陰影』

日本には『柔らかな陰影』をつくる素材が多様にある。湿気を含んだ空気を通る柔らかな日照と、木や紙、石畳を中心とした柔らかな建築、街並みの素材の柔らかさが反映されている。木の生育が限定され素材として石を使う西欧には少ない特徴である。



③西欧の対象空間に現れた『動く陰影』

西欧では、乾燥した光が澄みきって、光と影の対比が明瞭であり、被写体の輪郭線の動きを明瞭に映

す『動く陰影』が特徴的である。西欧の建築は石造りの壁が街路の基本輪郭線をつくり、窓によってのみ外界と接するため、開口部はファサードの表情をつくる重要な要素となる。したがって、開口部の装飾性も極めて高く、とくに南欧では凹凸の激しいバルコニーや遮光格子が幾何学的で変化の激しい陰影を形成し⁶⁾、街路の表情に動的な印象を与える。また、植樹が存在する街路や公園には、彫刻や噴水などのファニチュアや建築物などの多様な要素が併置されるため、動的な印象ともなる。日本の場合、商店街のサインのみが『動く影』に該当した。



写15 動く陰影(トルト)

④『静かな陰影』
全ての対象に、『静かな陰影』が存在し、共通して空間の冴えや聖域のシンボリズムを表現した。内と外の間領域に存在する日本建築の広縁や西欧の柱廊の陰影、都市構造物が示すコントラストの明瞭な幾何模様の陰影は、空間の冴えを与える。また、西洋の場合、教会や宮殿の薄ぐらい陰の中で、天窓やステンドガラスの光どりが崇拜や瞑想などの聖域のシンボルを演出する。一方、日本の社寺空間では簡素な空間構成の中で、燈明などの薄明りが土壁を伝い室内の隅に誘われて形成される沈潜された陰影が精神的な領域を演出する。



写16 回廊(ヒ'セツァ)

⑤日本建築の『静かな陰』
社寺建築、茶室、書院造りなどの日本建築は、外部と内部空間を厳密に区別しない空間構成に特徴があり、障子のフィルターを通した柔弱な光は、床や隅などの簡素な空間の中で、「奥」を意識させる静的で重厚な「静かな陰」を発達させた。



写17 ステンド'グラス(トルト)

⑥日本の外部空間に現れる陰影

日本の伝統的空間に固有の陰影として、美的と静的な評価が結び付いた『柔らかに静かな陰影』（陰

の中の影）と、男性的で有機的な『力強い影』（大樹の影）が得られた。これらは、共に外部の景観である。前者は、「奥」を意識するスタティックな側面と樹木のマイルドな側面の融合された、日本の美の凝縮形であり、後者は、外部空間に特徴的な、永遠の象徴としての常緑樹の陰影である。これらは共に、日本の美意識を色濃く反映しているといえる。

以上の結論は、本論文で扱った陰影の対象に調査上の制限があるため、まだ他に景観に固有な陰影や工夫された意匠が残されていると思われる。これらを丁寧に整理してゆくことが今後の課題である。しかし、今回得た陰影については、その気候風土や建築、街並みの構成の差異を実証的に説明するものであったと思われる。一研究のみで景観計画への示唆を得ることは時期尚早であるが、日本の伝統建築が生み出した繊細な陰影の意匠性を見直し、コンクリート、鉄、ガラスなどで構成される現代の都市風景に投影し、静寂に満ちた安寧や休息の景を積極的にデザインしてゆくことの意義を改めて考え直したい。

謝辞：本研究の遂行にあたり終始貴重なご教授を頂いた京都大学工学部佐佐木 綱教授に深謝の意を表します。また、貴重なご示唆を頂いた大阪府河内西茂行氏に感謝の意を表します。

(注) * 1 (参考文献4より)

陰影の基本構成要素は、①光源(太陽、月、照明etc)、②被写体(建物や植樹等の陰影の輪郭を作る被写対象物)、③スクリーン(路面や水面等の陰影の映る面)、④陰影(陰影の視覚現象)、⑤視点場(陰影の鑑賞場)と定義した。

陰影の基本タイプは、辞書の意味より、①光どり(地(スクリーン)が開いて、光源の光によって被写体が明るく映るタイプ)、②影どり(地(スクリーン)が明るく、被写体か光を遮って、後方にできる暗く映るタイプ)、③陰・陰(物に覆われた薄ぐらい背面・後方の場所のタイプ)、④鏡映り(鏡のように水面などに被写体自身の姿が映るタイプ)と定義した。

参考文献

- 1) 川崎雅史；『デザイン』の分析による修景デザインの研究，土木計画学研究・論文集No.7，pp.35-49，1989.
- 2) 飯田克弘・川崎雅史・佐佐木綱；街並みサインのデザインに関する研究，土木計画学研究・講演集No.13，pp.73-80，1990.
- 3) 川崎雅史・堀秀行；陰影景観の固有性に関する研究-景観表現に現れる日本の陰影空間-，土木計画学研究・講演集No.13，pp.81-88，1990.
- 4) 川崎雅史・佐佐木綱；景観に現れる陰影の心理的評価に関する研究，都市計画学会論文集No.25，pp.691-696，1990.
- 5) 滝沢健児；住まいの明暗，pp.5-6，中公新書，1982.
- 6) 樋口忠彦；日本の景観，pp.221-220，春秋社，1981.
- 7) 伊藤ていじ；日本デザイン論，鹿島出版会，pp.56-62，1978.
- 8) 宮川英二；風土と建築，pp.34-35，彰国社，1979.
- 9) 鳴海那岐・林原和彦；都市デザインの手法，pp.59-69，1991.